

〈修士論文要旨〉

自傷行為を通して見た思春期の心性

— 文献研究をもとにして —

森 昌 彦*

思春期の心性を自傷行為という問題行動から読み解こうとするのが本論の目的である。ここで言う思春期心性とは、少年少女に特有のこころの苦しみを指している。

わたしは、論文研究の目的を思春期こころの病の治し方の研究としようとは考えていない。そもそも、こころの病気が本当に「病氣」といえるのであろうか。もともとの脳器質の問題でなんらかの欠陥があるとすれば問題は別かもしれないが、思春期のこころの動きそれ自体が誰しも不穩で社会適応した成人を健常者の姿の手本とするのであれば、あきらかに全ての思春期の人間が異常者であるとも言いうるように思う。精神科や心療内科、あるいは学生相談室などに訪れるクライアントの内的世界にうずまくものは、そこに訪れることなく学生時代を終えていく他の若者や治療者自身の青春時代とも大差ないものだという事に気づかされる。誇大で、ある意味幼稚くさい妄想を絶対視することで自分の弱いこころを防衛しようとする姿は、例えば神経症や心身症を抱えて身体の苦しみを訴えることを除けばごく普通に若者のこころの内にはあるようなものである。考えてみれば、全ての人間が程度の違いこそあれ同じ苦しみを感じているはずなのである。産みの苦しみをなくして子どもから大人への脱皮は行えない。

本研究では治療についての考察を主題として行わないこととし、あくまでも思春期心性への理解を深めるのが目的である。自傷行為の研究であるから治療に関する文献を読むことが多くなる、そうすることで知識を深めていくことも当然必要である。そのため、治療についての考察にも幾分か紙面は割かざるを得なかった。しかし、自傷行為を阻止する方法を知ることと思春期心性を理解することは異なる。治療の仕方をただ理解しただけでは治療者の意図だけしか見ていないことになる。治療者の眼前に存在した思春期青年の自傷者たちの生き様を、心の原風景を、どの程度見たと言えるのであろうか。私としてはその程度のことが真の青少年理解だと思うことは大変に悲しく、また心許ないことと感ずる。

そこで、今回の研究は臨床心理学の研究とはとても呼べないものとなっているかもしれない。こころに響いた言葉はできるだけ参考にしたい、引用したいと思った。今回の研究では使用文献のジャンルがかなり広範に及び、一体自分は何をしたのか明瞭にならない状態が長く続いた。どんな学問でも地続きなのだという事実を信じ、現代民俗学から市販のファッション誌にまで目を通すこととした。読んだ本は全て、この研究と無関係ではあり得なかっただろうし、自分のこころの中では思春期青年理解の手がかりとして、また自分とは何かの答えとして生き続けるだろう。しかし、論文中にはとても収まりきれないものがたくさんあるだろうことが残念である。多

平成19年度 *社会学研究科社会学専攻 (臨床心理学コース)

くの情報を時間の制約や焦りから論文中に活用できないかもしれない。できるだけ多くの発見を発表し、文中に盛り込みたいと努力するつもりではある。以下は、本論で特に重要とした事柄をキーワードとして提示する。

(キーワード① 思春期の孤独感) 思春期の自傷のきっかけが、ほぼ例外なく孤独からくるさみしさに端を発するものであることは、かつて思春期病と呼ばれ「破瓜型」などの型式名も存する統合失調症発症の直接のきっかけが形こそ様々であれ性欲処理の失敗によるものがほとんどであることも酷似している。精神分析の治療方法の根幹が過去の置きへのとらわれの解消である事実も人間がノスタルジーにとらわれて生き続けることの証拠の一つではないだろうか。

(キーワード② 現代社会の中の自傷行為) 自傷行為は、1960年代ごろからアメリカを起点として世界各国にひろまったとされる。石毛(こころの科学127 自傷の文化史)によると、日本の漫画や音楽の歌詞を調べてみた結果、1975年にリストカットの移入と受け入れが行われた可能性の高いらしいことが考えられると言う(心理学がブームになっていく時期も、自傷のブームとだいたいにおいて機を一にしているのは、なんらかの関連があると考えている。後述。)自傷の文化史については後に改めて考察する。この時代、高い経済発展を成し得た国家にのみ自傷行為は広がりを見せたが、発展が遅れていたその他の国々や、アフリカ原住民の社会ではこのような行為は起こらなかった。原始心象の中の自傷行為は、我々の社会で問題とされるものとは異質の、むしろ健康的なもの(通過儀礼の儀式として行う)と考えてよいようだ。

アメリカの1960年代にしろ、ヨーロッパや日本の70年代にせよ、このころから人々の家族形態と生活態度に決定的な変化が起きた。核家族化、地域共同体の崩壊、個室マンションやアパートの乱立である。それは、「一人部屋に閉じこもり鍵をかけてしまった」とでも例えられるようなスタイルを当たり前ものとした。最初はお互いに迷惑をかけないために干渉を無くしたのに、いつしか傷つくことを怖れて他人との深い接触を絶ってしまった。新しく生まれてくる子どもたちは、親の孤独な生活スタイルをきっかけも知らずに真似して修得することにより同じことを繰り返す。子どもにとって親は全世界的な絶対存在であるから、自分の行動を疑う余地はない。

そのような子どもたちが多くの思春期自傷者たちであることが、今回の研究ではっきりしてきた。我々の社会にくらべ、アフリカや中南米の部族社会にはいまも昔ながらの人のつながり、家族のつながりがやや形を変えつつも残っている。さみしくはないはずである、理解されない孤独と言ったものはどの社会でも存在するのではあろうが、表面的には自傷しなければならないほどに追い詰められる社会よりはよほど上手く機能している場所なのだと思う。

(キーワード③ 自然とのつながり) さらに忘れてはならないことは、自傷行為が起こった社会は自然環境が急速に壊れていることである。同じ国でも自然の多い田舎には自傷者の比率はずっと少ないのではないか。自傷行為は、かつての通過儀礼の名残であるとの見方もできるかもしれない、しかし何度も行うことにはどう言った理由があるのだろうか。不自然なのである、かつては自然であり一回切りで終わったことをどうして重篤な身体状態になるまで続けるのか。人間の

存在(ユング心理学的に言うとき魂)のありようが自然と全くコミットしないと心身の不調をきたすことは多くの事例が証明している。

現代文明の特に都会や町で生きる人達が本当に環境に適応して自然さを保てるのかと言う疑問が起こる。セラピストの中にも、都会に行くことで感性が落ちてしまうと言う人がいたように思う。自然とは無意識的なものである、そのために気づいたところには全く不自然さの固まりになって心身のバランスを失って混乱した状態になっている場合は大いに考えられる。ユングの共同研究者であり東洋研究者であったウィヒャルト・ヴィルヘルムが紹介した「道(タオ)」という思想・概念についての話からも、そのことは容易に想像がつくことである。それは人が自然な生き方を見失っていると世界全体がバランスを失っていくことを説く話である。リストカットの乱発は、自然なつながりが切れていて戻らないことの結果であろうと思われる。

(キーワード④ 自己イメージの問題) いま一つそこで問題になるのがボディーイメージの問題である。自然と接する機会を失ったことによる子どもたちの感覚表現能力や思考力の欠如の報告(鍋田2007)とも関連するかと思うが、そのような子どもにもボディーイメージの歪みから摂食障害におちいる子どもも多いらしいことがわかってきた。摂食障害とともに自傷を行う率が非常に高いことが調査からも明らかにされている(ウォルシュ1988及び2007など)。身体を何度も損傷させてもまともに社会生活はできることが多いとされる自傷者たち。これは、意識と身体が切り離されてボディーイメージが壊されたことの現れとも考えられる。

自傷者のほとんどが境界性人格障害(BPD)であると言われているが、そのことについても考えていきたい。

本来、この程度の問題を取り上げたところでとても説得力ある論述にはならないと思うが、上に挙げた四つのキーワードに重点を置きつつ思春期の心性、特にティーンエイジャーの心象が少しでも反映された論文になり、思春期心理の理解を深めることができる論文になることを心がけたい。